

新 市 町

御前山村



宮下町長

1. 沿 草

この村は水戸からバスで約1時間東茨城郡の西北端に位し、東は那珂郡大宮町、西は栃木県の茂木町に、南は桂村と西茨城郡七会村に、北は那珂郡緒川村にそれぞれ隣接している。村の大部分は八溝山系の小山岳地帯に属し、断崖を洗う那珂の清流と関東の嵐山といわれる御前山に臨む誠に風光明媚なところで、昔から水戸、宇都宮、太田、大宮、鳥山に通ずる交通の中心地として宿場が発達したのである。明治維新前は佐竹氏、徳川氏の所領であったが、明治以降は那珂郡と東茨城郡に編入され、昭和30年2月11日には那珂郡野口村と東茨城郡伊勢畑村が合体して御前山村が誕生し、さらに31年9月29日には那珂郡長倉村が合併して、今や面積44.30平方町、人口7,970人(男3,811、女4,159)、世帯数1,469を有する純農村として、(昭和32年11月毎月人口調査)全村民の融和協調をモットーに新しい平和郷の建設と村民の福祉増進のため力強い足どりを示している。

2. 産 業

まず農業面を見ると、農家戸数1,127、農家人口6,407人(男3,044、女3,363)、耕地面積706町(田212町、畑483町、樹園地11町)に達し、なかでも大麦221町、小麦188町、大豆74町、たばこ133町、さつまいも40町などが目立っている。(昭和32年冬、夏期農業調査)特に葉たばこの生産は多く、毎年4,000~5,000万円にのぼり、こぼうもまた年産1,000万メで、品質の優秀さは他都県でも好評を博している由。村としては新農山漁村建設計画を進めており、特に山間地帯に適する、しいたけ、くり、かき、もも、こんにやくなど特用作物の栽培を奨励して農家における現金収入の増加を図ろうとしている。また土地改良事業も交換分合を中心に全地区へ実施しており、農業生産力の増強にも大きな役割を果たしている。

次に畜産面を見ると、乳牛10頭、役牛348頭、馬88頭、めん羊60頭、山羊183頭、馬12頭、めん羊60頭、山羊183頭、豚226頭、兎462頭、にわとり6,838羽に達し、(昭和32年2月冬期調査)次第に農業の有畜化が進んでいる。村では農業協同組合の育成強化を通じて養豚、養鶏、めん羊飼育による農業経営の合理化と優良品種の普及を促進するとともに、農事研究会グループの連合化を図り、活発な研究活動を続けていることは注目すべきである。特にこの地方は養鶏が昔から非常に盛んで、鶏卵の出荷は年間約2,000万円に達し、なかでも種卵の品質は優秀で

県内各地に販売されている。

また養蚕農家は63戸、年間取繭高は2,588メであるが、たばこの栽培面積の増加に伴って減収の一途をたどっていることはまことに寒心に慄えない。

またおもな農機具の普及状況を見ると、電動機18台、石油発動機197台、ハンドトラクター1台、動力耕うん機7台、動力脱穀機218台、足踏777台、動力糶すり機35台、製粉機41台、精米機171台、精麦機13台、人口噴霧機70台、動力製縄機22台、足踏527台、畜力カチペーター36台、畜力砕土機55台、畑用播種機119台、畜力すき267台に達し、年を追って農業の有畜化が進んできた。

次に工商業面を見ると、山間地帯なので見るべきものは少ないが、まず法人および常用労働者を有する個人商店数7、従業員16名、年間販売額3,660万円、常用労働者のいない個人商店数51、従業員71名、月間(6月)販売額250万円に過ぎない。(昭和31年7月商業調査)また工場数は25、従業員134名、年間製造出荷額7,255万円である。(昭和31年12月工業調査)

3. 教育文化

ここには小学校3、中学校3あつて、小学児童1,222名(男606、女615)、中学生徒574名(男314、女260)を擁しており、村としては長倉中学校(総建坪数257.38坪)を総工費670万円で建設したのははじめ、学校施設及び教材の整備拡充に努めている。国民健康保険組合も伊勢畑地区において実施していたが、きたる4月1日に全村加入の運びとなるように諸般の準備を進めている。また消防施設においても年々拡充強化に努め、特に可搬式ポンプ16台、動力(35馬力)ポンプ2台を擁しており、この地方としては優秀な実績を収めている。村としてはさらに有線放送による村民間の連絡と連絡を図る計画を持っていたが、取りあえず農村公衆電話(電話3)を開設してその便宜を図ろうとしている。

ここは旧蹟が非常に多く建保5年に親鸞上人の実弟山蓮義(入信坊)が開基した寿命寺や徳川斉昭時代の文化元年に創設した時雍館(藩校の一つで和漢の学、医学、刀槍、射砲術の研究)跡、仙石義政外16名の彰義塚、連山交易和尚の墓、弘法大師が刻んだ梵字の碑、めたと伝えられる相川敏泉、佐竹氏のとりでがあつた本城山、山王殿堂などがある。名所として知られて、県立公園御前山は、清らかな那珂川の流に沿って全山1年以上の松、杉、檜の大樹がうっそうと茂り、春はつばき、山桜にアイソ釣、夏は鮎釣、秋は紅葉やきのこ、栗拾い、鮭とり、高山植物の採集、きじ、山鳥、猿など四季を通じて美しい風致をなし、またハイキングコースとしても好適なので多くの行楽客を呼んでいる。

4. 財 政

昭和32年度一般会計歳入歳出予算

(単位円)

歳入	村税	地方交付税	公営企業及使用料及び財産収入	国庫支出金	県支出金	寄付金	繰入金	繰越金	雑収入	村債	合			
8,663,241	10,577,210	3,507,681	109,900	525,634	536,870	2,000	437,621	1,150,000	164,972	2,500,000	28,175,258			
歳出	議会費	役場費	警 察 消防費	土木費	教育費	社会及び保健衛生費	産業 労働施設費	財産費	統計調査費	選挙費	公債費	諸支出金	予備費	合
554,300	7,410,158	981,635	1,703,720	12,042,220	279,857	336,575	2,075,626	368,803	95,644	168,335	223,821	1,476,693	200,000	28,175,258

の 横 顔

ましま 猿島町



猿本町長

1. 沿革

この町は猿島郡の中央部に位し、東は結城郡石下町に、西は境町、南は岩井町、北は三和村にそれぞれ隣接しており、西仁連川や諏訪川の流域に開けた肥沃で平坦な農耕地帯である。昔この地方は豊城入彦命や猿島命の治下にあつたと伝えられるが後世平将門が沓掛地区を平安の都に擬して聚落の建設を行い、今でも柏畑小路、手形小路などの名が残っている由。徳川時代には大部分幕府直轄の代官領に属していたが、明治維新に葛飾県、千葉県に属し、明治8年に本県に編入された。こゝも町村合併の機運に伴って、まず昭和30年4月1日に旧生子菅、逆井の両村が合併して富里村となり、昭和31年2月1日には富里村と沓掛町が合併して、東部2,633、南北6.01、面積31.85平方、人口15,829(昭和31年7、633、女8,196)、世帯数2,508を有する(昭和32年11月毎月人口調査)猿島町が新しく誕生し、全町民の生活向上と福祉増進を図り、平和で明るい町作りのため奮闘し進んでおり、今後の発展が大いに期待される。

2. 産業

まず農業面を見ると、農家戸数1,996、農家人口13,222(男6,383、女6,841)、耕地面積1,802町(田643町、畑1,170町、樹園地89町)に達し(昭和32年8月夏期農業調査)、なかでも主なる農産物は、米15,785石、大麦16,800石、小麦8,347石、葉たばこ128,400、白菜154.8万、すいか32万メにのぼり農家収入の大きな分野を占め、このところの面目を如実に示している。特に蔬菜類の栽培技術と共同出荷組合の強化によって白菜、すいかは本県の特産物となり生産技術と品質の改善に努め、東京市場でも大変好評を受けている由。次に畜産面を見ると、乳牛37頭、役牛740頭、馬107頭、めん羊27頭、山羊10頭、豚1,000頭、にわとり10,000羽を飼養しており(昭和32年2月冬期農業調査)、なかでも豚は年々増加し、子豚を400頭程度京浜方面へ出荷している。町としても養豚組合の育成強化に努めるとともに畜産振興策を講じて新農村建設計画の立案を急いでいる。

またおもな農機具の普及状況を見ると、電動機157台、発電機987台、動力脱穀機1,047台、足踏脱穀機312台、動力糶すり機211台、製粉機186台、精米麦機347台、噴霧機611台、動力製糶機69台、足踏製糶機1,096台、動力カルチベーター308台、水田中耕除草機61台、畑用播種機243台、畜力すき602台に達し(昭和32年冬期農業調査)、土地の交換分合事業の推進や農事研究グループの

育成と相まって、次第に農業電化と畜力化が進んでいる。

次に商工業面を見ると、法人および常用労働者を有する個人商店数12、従業者57名、商品販売額2億3,000万円、常用労働者のいない個人商店195、従業者371名、月間(6月)販売額1,300万円で小規模な食料品、衣服身廻品洋品雑貨の小売店が多い(昭和31年7月商業調査)。また工場数は39、従業者141名、年間製造出荷額5,135万円で(昭和31年12月工業調査)、特に目立つのは製茶業のみである。

3. 教育文化

この町には小学校4(分校2)、中学校が3校あつて小学児童2,572名(男1,268、女1,304)、中学生徒1,087名(男538、女549)に達しているが、合併後まだ日も浅いので、危険校舎の増、改築、運動場の拡張などを年次計画に従って推進しており、教育内容も次第に充実してきた。次に社会教育面においては、新生猿島町の育成のため旧地区観念の一扫を図り、町民融和の契をあげるように、公民館、男女青年団、青年学級、婦人会などを通じて、新町建設の理想の普及をはじめ、教養文化の向上と技芸および料理の改善に活発な運動を続けている。この名所、旧蹟としては、まず昭和6年6月に県から天然記念物として指定された沓掛地区の大櫓がある。この櫓は目通り36尺といわれる大木で、神代の昔利根上流に住んでいた土族が、移住のため東方をめざして進んでいる途中、夜半に数多くの星が降りそそぐ方向へ行くと森厳きあまりないうつ蒼たる丘に出たが、南方には清水をたたえる沼沢に臨み、ここを好個の移住地と定めた。その後数年の間丘の木々は降る星の毒気によって櫓1本を残して全部枯れてしまったので、この櫓を神木として一種の信仰視されるようになり、後世ここに鎮座された神明社の周囲には、その時代の土族が使用した土、石器が古墳として採掘されている由。また逆井地区には貝塚があり、生子地区の万蔵院の宝物などもある。

町長の抱負

1. 農業生産力の増強に寄与するため、道路、橋梁の完全補強を計ること。
2. 農地の集団化を強行して新式農機具の活用を努め、耕地の改良によって湿田地帯を解消し、農地利用率および集約度の高度化を図ること。
3. 青果物集荷場を各地区へ建設して、農業経営の合理化を促進すること。
4. 納税組合の強化育成を図って滞納の解消に努め、健全財政の確立を期すること。
5. 消防施設の拡充強化を図って、物的資源を確保すること。
6. 各地区ごとに劇場を建設し、町民の娯楽施設として利用させること。

4. 財政

昭和32年度一般会計歳入歳出予算

(単位円)

町 税	地 方 交付税	公営企業及 び財産収入	使用料及 び手数料	国 庫 支出金	県 支 出 金	寄付金	繰越金	雑収入	町 債	合 計				
22,930,800	8,680,000	600	240,000	1,355,000	334,210	620,100	13,391	420,000	1,200,000	35,794,101				
議会費	役場費	消防費	土木費	教育費	社会及び 労働施設費	保健衛生費	産業経済費	財産費	統 計 調査費	選挙費	公債費	諸 支 出 金	予備費	合 計
748,480	9,706,171	3,049,925	3,951,400	3,767,548	317,785	955,250	4,514,308	150,564	150,720	112,800	399,000	2,311,843	500,000	35,794,101